古部賢一 & 野原みどり デュオ・リサイタル

1部

オーボエ・ソナタ ニ長調 Op.166 ……サン=サーンス

ベルガマスク組曲(ピアノ・ソロ)……ドビュッシー

オーボエ・ソナタ……ブーランク

2部

オヴィディウス神話による6つのメタモルフォーゼ(オーボエ・ソロ)……ブリテン

二つのファンタジー……ニールセン

ベニスの謝肉祭のテーマによる変奏曲 Op.20 …ラリエ

夏

2008 四季のコンサート 25周年記念

2008年6月27日(金)6:45PM
会場:浜松市教育文化会館
主催:浜松音楽友の会

プロフィール

古部 賢一(オーボエ)

東京芸術大学在学中に新日本フィル首席奏者に就任、現在に至る。柔らかく甘い音色と響き、バロックから現代音楽に至る幅広い様式に対応する柔軟性と優れた音楽性が高い評価を受け、ソリストとして国内外の数多くのオーケストラと共演し、室内楽の分野でも幅広く活躍中。これまでに共演したメニューイン、ロストロポーヴィチ、朝比奈隆、シモン・ゴールドベルクなど、多くの名匠から高い評価と薫陶を受けている。小澤征爾からの信頼も厚く、サイトウ・キネン・オーケストラや、長野ウィンター・オーケストラ(オリンピック・オーケストラ)にも参加。2005年には、東京で行われたラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン音楽祭に出演した。ギターの鈴木大介とのコラボレーションも好評を得ており、アルバム「DAYDREAM」(フォンテック)をリリース。ほかに、ソロ・デビュー・アルバム「ドルチェ」と、ミラノ弦楽合奏団と共演したバロック協奏曲集「アマービレ」をリリースしている。第10回出光音楽賞をオーボエ奏者として初めて受賞。第8回「国際オーボエコンクール・軽井沢」の審査員を務めるなど、後進の指導にもあたっている。東京音楽大学、昭和音楽大学非常勤講師、兵庫芸術文化センター管弦楽団アソシエイト・プレーヤー。

野原 みどり(ピアノ)

クリアな音色とスケールの大きい音楽作りに定評がある、実力派ピアニスト。1987年日本音楽コンクール第1位。1991年ロン=ティボー国際ピアノコンクールにて優勝。この快挙によって一躍注目を集め、ヨーロッパ各地及び日本国内でコンサート活動を開始。これまでロリン・マゼール、小澤征爾など世界的指揮者に認められ、1994年、97年は、ロリン・マゼール指揮/フィルハーモニア管弦楽団、1994年小澤征爾指揮/新日本フィルと共演。1995年にはマゼール指揮のピッツバーグ交響楽団に招かれ、プロコフィエフの協奏曲第2番を共演。ピッツバーグ・トリビューン紙面で「まるでプロコフィエフが彼女のためにこの曲を書いたようだ」と絶賛を博した。また、ベルリン・フィル・ヴィルトゥオーゾ、ドレスデン・フィル、アンサンブル・ウィーン=ベルリンの日本ツアーのソリストとして、またヴィオラの名手ジェラール・コセとのジョイント・リサイタルなどで活躍。現在も日本の主要オーケストラとの共演をはじめ、リサイタル、室内楽公演などいずれも好評を得ている。CDは、「ラヴェル:ピアノ作品全集I,II」、「月光」(アウローラ・クラシカル)などをリリース。

古部 賢一(Ob)
野原 みどり(Pf)
デュオ・リサイタル

写真:北山宏一　写真:武藤 章

KEN-ICHI FURUBE
MIDORI NOHARA
DUO RECITAL

曲目解説　真嶋雄大

●サン=サーンス（1835～1921）／**オーボエ・ソナタ ニ長調 Op.166**

サン＝サーンスは一貫して古典主義、ロマン主義を貫いた。そのため印象主義が興隆した晩年には孤立していたとも言われる。しかし近年その作品が再評価され、昨年にはピアノ作品全集の出版も開始された。サン＝サーンスは没した年、この作品の他クラリネット（Op.167）とバスーン（Op.168）のためにソナタを書いた。そのいずれもが、伝統的な筆致を極限まで高めた古典的で自由な境地を示している。このオーボエ・ソナタは、パリ音楽院管などで首席奏者として活躍していたルイ・バに献呈された。3度、5度、オクターヴと音程を順次広げながら楽想が発展していく第1楽章アンダンティーノ＝ポコ・アレグロ、牧歌的風趣にも寂寥感が滲む第2楽章アレグレット、快活なリズムでヴィルトゥオーゾ性豊かなパッセージが連なる第3楽章モルト・アレグロで構成されている。

●ドビュッシー（1862～1918）／**ベルガマスク組曲**（ピアノ・ソロ）

「ベルガマスク」とは作曲家フレスコバルディの組曲にある舞曲の名称であるが、実はドビュッシーが留学中に訪れた北イタリアのベルガモ地方、及びその地方の舞曲「ベルガマスカ」に由来しているとされている。さらにこの組曲は、ヴェルレーヌの詩集「華やかな宴」に含まれている『月光』の一節「マスクとベルガマスク」に触発されて創作されたとも考えられており、ドビュッシーが仮面喜劇に対して描いた幻想、つまり仮面をつけて悦楽を貪った17～18世紀のフランス貴族文化へのノスタルジーに、伝統と新鮮味を加えて見事に融合させた独自の語法の確立でもある。〈前奏曲〉、〈メヌエット〉、最も有名な〈月の光〉、そして〈パスピエ〉の4曲からなるが、教会旋法など明晰な様式を踏まえながら、洗練された斬新で優美な感覚は、印象主義の第一歩を示すものとして甚だ重要である。

●プーランク（1899～1963）／**オーボエ・ソナタ**

プーランクは、デュレ、オネゲル、ミヨー、タイユフェール、オーリックとともに「フランス6人組」のひとり。これは20世紀前半フランスで活躍した作曲家の集団で、ロマン派音楽や印象主義音楽とは袂を分かち、新古典主義音楽に標榜する傾向を示した。プーランクは、ピアノや管楽器のための室内楽曲などに優れた作品を残したが、特に晩年管とピアノのためのソナタを好んで書いた。1956年から62年にかけて、「フルート・ソナタ」、「ホルンとピアノのためのエレジー」、「クラリネット・ソナタ」がそれで、この「オーボエ・ソナタ」は遺作となった。献辞には「プロコフィエフの思い出のために」と記されており、第1主題「エレジー」、第2楽章「スケルツォ」、第3楽章「悼み」は、緩急緩のスタイルをとっている。

●ブリテン（1913～1976）／**オヴィディウス神話による6つのメタモルフォーゼ**（オーボエ・ソロ）

ベンジャミン・ブリテンはイギリスを代表する作曲家・指揮者・ピアニストで、歌劇《ピーター・グライムズ》や《戦争レクイエム》、《青少年のための管弦楽入門》などが代表作として知られている。この作品は、帝政ローマ時代の詩人オヴィディウスがギリシャ神話などに基づいて著した長編の詩「メタモルフォーゼ」に題材を得ている。つまりブリテンはこの大作の登場者から6人を選び、無伴奏オーボエという楽器特性を生かした視点で、それぞれ描写的かつ叙情的に詩情を表現しているのである。

Ⅰ〈パン〉、Ⅱ〈フェートン〉、Ⅲ〈ニオベ〉、Ⅳ〈バッカス〉、Ⅴ〈ナルシス〉、Ⅵ〈アレトゥサ〉の6曲で構成されている。

●ニールセン（1865～1931）／**二つのファンタジー**

カール・ニールセンはデンマークでもっとも著名な作曲家である。アンデルセンの生地に近い農村で生まれ、父の趣味の楽団で6歳からヴァイオリンを弾いた。コペンハーゲン音楽院を卒業して王立劇場オーケストラのヴァイオリン奏者となり、その頃から作曲を手掛けるようになった。作曲家としては多作家で、歌劇を除くほぼすべての分野に渡って創作活動を試みた。特に6曲ある交響曲や、ヴァイオリン、フルート、クラリネットなどのための協奏曲、木管五重奏曲はよく知られ演奏される機会も多い。この「二つのファンタジー」は、ニールセンの最初の作曲である「弦楽オーケストラのための小組曲」に続いて、1889年に書き上げられた抒情豊かな作品である。

●ラリエ（1837～1892）／**ベニスの謝肉祭のテーマによる変奏曲 Op.20**

この作品の作曲者テオーフィル＝カシミール・ラリエについて今日多くが語られている訳ではないが、1860年代を中心に、パリ・オペラ座などでオーボエ奏者として活躍、管楽器を軸とした作品をいくつか残したことがわかっている。その作品には、「バスーンとピアノのためのファンタジー・ブリランテOp.21」や「オーボエとバスーン、ピアノのためのテルツェットOp.22」、「ショパンの主題によるオーボエ・ダモーレとピアノのためのファンタジー」などがあるが、ベニスの有名な民謡を基にしたこの変奏曲は、色彩感と情感に富み、中でも広く親しまれている。

まじま ゆうだい（音楽評論家）